

風の吹くまま

小島ゆかり

白鳥は哀しからずや空の青海のあ
をにも染まらずたよる

若山牧水

あまりにも有名な牧水の名歌。「しらあとりはあり」と歌にも歌われて愛されてきた一首だが、実は鑑賞をめぐって、おもしろい論議のある作品でもある。

論議の中心点は二つ。

白鳥は一羽かそれとも数羽なのか。また、白鳥は海に浮かんでいるのか空を飛んでいるのか。

ある人は、孤独の表現として一羽説。ある人は牧水の感傷の傾向として数羽説。ある人は、またまた孤独に注目して海に浮かんでいる説。ある人は自然な風景として空を飛んでいる説。ふーむ、一羽のような数羽のような。海にいますような空にいますような。白鳥はいたいどうしているのだ…。

白鳥は

ところが先日、私はさらにまた新しい鑑賞に出会った。

先日参加した沼津文学祭の会場に、へ短歌を絵にしよう優秀作品展というコーナーがあって、そこに地元の小学生・中学生の絵が展示されていた。

絵の横には一首づつ牧水の歌が掲げられている。子供たちなりに、牧水の歌を鑑賞して、短歌を絵にしたのである。どの絵も実に素晴らしくて感心したが、中に、この「白鳥」を描いた絵があった。中学二年の三宅悠太くん。それは、グラフィック・デザインのようにつきりとシンプルに描かれた絵で、白鳥は海面より少し上の空を飛んでいる。そして、海の中にぼんやりと白鳥の影が映っている。

私は、あっと思った。白鳥は一羽、でも影の白鳥がもう一羽。そして、空を飛んでいる白鳥と、影として海に映っている白鳥。

歌人たちの論議の隙間を、中学生の直感がするりと潜り抜けた。これだから短詩形はすてきだ。もともと詩歌に正解なんてないのだから。(歌人)